

Title	龜報恩譚の一形式
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.1 (1936. 5) ,p.74- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360500-0074">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360500-0074</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 龜報恩譚の一形式

我國の浦島説話が動物報恩譚や仙郷淹留説話との混合によりて生じたことは疑ひをいれないが、その龜が恩を報ゆる説話の東亞分布の一例として安南の傳説を此處に紹介しよう。新編傳奇漫録増補解音集註卷四、南昌女子傳に次の如き話が見える。安南の南昌に武氏設と云ふものあり、貞淑にして容姿美はしく、同邑の張生之を慕ひ嫁に貰ひ受けた。所が彼は甚だ嫉妬心あり妻の行狀に對して監督甚だ嚴重であつた。所が當時チャンパとの戰あり、彼も兵に徴せられて進發した。その留守中夫の母は病死し、妻は懷妊してゐた男子を分娩した。まもなく戰終つて張生は歸り、一日息子を携へ、母の墓地に行かうとすると兒は之を聞かず、泣いて云ふ。「あなたはほんとにお父さんか、昔のお父さんは口をきかず、私を抱きもしなかつた」と。張生不思議に思ひ、よく問ひたゞすと兒は父の不在中常に夜になると丈夫が來て母のそばを離れなかつたと答へる。そこで張生大いに怒り、妻の不貞を疑ひ、之を責めたので女はその無實の罪に泣き江に投じて死した。その後張生夜兒と共に座してをると壁にうつる影を見て兒は「お父さんがまた來た」と叫ぶ。即ち夫の留守中妻は壁にうつる影を見て戯れにお父さんと呼んでゐた事が解り大いにやんだが既に後の祭であつた。その時同里に潘郎と云ふものあり、或夜綠袍の女子が泣いて命を請ふ夢を見、翌日漁夫が綠殼の龜を獻じたので早速之を水に放してやつた。其後暴風に遇つて舟覆り、溺死して龜洞に屍が流れよせた時、その神なる龜洞靈妃が之を見て我が命の恩人であると云ひ、いろいろ手當して蘇生せしめ、水晶宮内朝陽閣で盛宴を張つて款待した。その周圍に群つた姬嬪の中に古への武娘あり、冥後潘の傍に來て委細を語り、之に金の釧を託して夫に證とすることを頼んだ。翌日潘澤山の土産を貰ひ赤罽に送られて陸に歸つた。張にその事を語つたが張始めは信ぜず、その金釧を見せられて大いに驚き、水邊に醜を設け、三晝夜祭つたので波間に武娘が從車五十餘輛を從へ隠見した。張生大いに之を呼んだが彼女は吾靈妃の徳に感じ、また人界に歸るを願はずと云つて再び水中に没つし去つた云々と云ふ物語である。此物語の中に於て龜報恩譚は副次的に現はれるに過ぎないが我國の浦島子の物語の形式が此型の説話と仙郷淹留説話との混合であることは明瞭に看取せられる(松本信廣)。